

随 想

良い英文を書くために
—英語論文の文体について—

松 本 哲 也*

《Le style c'est l'homme》[文は人なり]の色彩の濃い文学作品と異なつて、現代の科学技術論文には形式的論理的（集团的）スタイルが利用されている。それは、科学技術文献が基本的に論理的側面におかれていることと、研究自体が集团的努力に対する自己の仕事の貢献と考える自然の帰結である。

カウフマンはその著“アメリカ技術論文の特性”(1960)の中で、次の興味ある公式をあげていることをプンプンスキーは指摘している。

$$K = \frac{A}{V} \times \frac{V_p}{V_a}$$

ここで、Aは名詞、形容詞、分詞の数、Vは人称動詞の総数、 V_p は受動態の動詞、 V_a は能動態の動詞をあらわしている。この場合、 $\frac{A}{V}$ は正確度、スタイルの非情緒性の度合いをあらわし、 $\frac{V_p}{V_a}$ は非人称性の度合いをあらわす。この公式を利用すると、一人称で書かれ、動詞の人称形をつかつた個性的なスタイルの記述が、係数Kを変化させ、数世代の専門家たちがインフォメーションのためつくり上げた叙述スタイルを乱すことがよくわかる。

O'Connor らは 'As is shown by Fig. 1' を 'Fig. 1 shows' に、'It is thought' を 'We believe' に受動態を能動態にするよう多くの例をあげて、受動態の過度の使用をいましめている。さらに、受動態の使用によつて研究の objectivity (客観性) の見せかけをすることはサイエンスにとり望ましくないものとして、長い間 subjectivity (主観性) アプローチとしてタブーとされていた一人称および能動態を使用することを奨励している学術誌がふえていることを述べている。

いずれにしても、一人称がふさわしい文章の中に使用されるならば、'Examining the results, the conclusions are obvious' のような '結論が結果を検討する' 文法的にいう dangling particles (懸垂分詞) の誤りも是正されることだろう。

以下に、論文の構成要素のいくつかを採りあげて、その書き方についての英米の専門家の意見をとりあげてみ

よう。

1. 表題 (Title)

タイトルはラベルであり、コンピュータ・インデックスの普及をあわせ考えると HCl は hydrochloric acid とし略字や記号を使用すべきではない。'Observation of', 'A study of', 'An approach to' などではできるだけ省く。

2. 著者名 (Author)

R. A. Day は、共著者方式 (multi-author approach) は実際の研究者に dilution effect を与えるものであり、そのリスト・アップには十分な考慮をはらうべきであるとしている。同一の貢献度合いの場合には、英国のある学術誌の例としてアルファベット順で名前を記載することを定めているところもあるが、senior researcher が最初か最後にくることが今までの慣習のようである。しかし、最大の貢献者である担当研究者がトップに記される傾向にあり、大学院生を含めて若手の研究員に first-place listing を与えることは奨励の意味で重要であるとしているのは興味ぶかい。

3. 抄録 (Abstract)

Rapid reading が要求されている現代においては、タイトルと抄録のみで読者は、全体を読むべきかどうかを決めてしまうことがしばしばある。時制については、一般に要旨は過去形とし、結論部分となるパラグラフは現在とする。明らかな結論が得られない場合には、'The effect of A upon B is discussed' のようにすることもひとつの方法である。

4. 本文 (Text)

実験 (Experimental) と結果 (Results) は過去形に、序論 (Introduction) と検討 (Discussion) の項目の大部分を現在形にする。他の研究者の文献を引用する場合には、その時制はまちまちに記述されている。しかし、オリジナル論文として学術雑誌に発表されていることは knowledge として認められているのだから、現在時制として記述すべきである。筆者の経験では、他の研究者の結果を過去形で記述して反論または不同意を効果的に表現している論文もある。

以上述べたことは、それぞれの著者の考え方に一致す

* 日本金属学会事務局長

るものではない。日本語と同じように、英語も時と共に変化している。英語科学技術論文の言語を簡素化しようとする試みもある。それはラテン語（フランス語）系のシノニムをもつと短い英語系のことばにかえるべきであるとの主張である。この潮流の正当性を認めるかどうかは読者の判断に委ねるほかない。

文 献

- 1) 早川光雄ほか訳編：プムピャンスキー 科学英語・

科学ロシア語（1970），[総合図書]

- 2) V. BOOTH: Writing a Scientific Paper (1978), [The Biochemical Society, London]
3) R. A. DAY: How to Write and Publish a Scientific Paper (1979), [ISI Press]
4) M. O'CONNOR and F. P. WOODFORD: Writing Scientific Papers in English (1977), [Pitman Medical Publishing Co. Ltd]